

J 2.991:2

2 of 3

* Mojave, Vol. 4, June 1943

67/14

C

之野人

卷之三

六月





モハベ第四号 六月十日發行 ポストン第三館存

目次

表紙 ポストン山 鶴岡鶴年

宗教情感

増本美條

創作見合

くすのせ

人生の目的

長谷川生

偶感

南

或女學子等紙 安井騎兵

病氣見舞についで

松村とめ子

ポストンの地質についで

民謡 柴田峰南 山北京水

創作初夏の夜 百合子

翻譯 日本夫妻 城本生

父の日の歌 山邊の谷 藤弘

詩 落ちゆく陽 岩橋弘

詩 わかれ

鈴川愛

モハベ俳句

和氣湖月編

海無風俳句

増本美條

3/ 29 28 28 27 19 16 15 13 12 5 4 2 56 1

能句 松本五郎 和氣湖月編

川柳

マダナ川柳句会句集

モハベ音頭 蒼逸

石の鑑賞の夕を見る

か能子

詩 子別水やくくすのせ

モハベ文藝同人

短歌集 (到着順)

懊惱歌日記 長谷川生

脚本 梓弓 序文くすのせ

川柳 北村源正 大吾郎

消息 編輯室便り

62 61 56 58 52 40 38 36 35 33 32 31





宗教隨感

増本美篠

吾々人間は靈の動物である。靈体である以上靈の救主を何れかに求むるの必然である。そこには宗教の必要が生ずる事もある。當然である。併し世の中には往々宗教の如何なるものか内容をも検討せず盲目的信仰の持主がある様に思ふ。例へば如何に美味しい食物でも之れを咀嚼しなかつたなら体に害こそ及ばせ營養にはならぬと同じく宗教でも盲目的信仰者は時偶常人には狂者と見える如き行動に出る人がある。ある田舎にMと言ふ連も佛教熱心信仰者が居た。このグループの人達が集つて信仰座談会を開いて夜明けまで信仰談に熱中した。太陽を拜んで泣いたり月を拜んで喜んで果は人々に手を合せて拜む様になり食物も余り摂らず有難うと念佛のみ唱へ仕事も手に付かず毎日夢遊病者の様に彷徨する様になつて遂にS市の瘋癲病院に送るの止むなきに至つた。幸にも療養生活二ヶ月の後退院する事が出来て其後は眞の信仰生活が続けて居る。此の事を記憶して居る。これに似た宗教狂者が現に吾等の転

住所にある。H夫人と言つて主人は開戦後拘留せられ収容所に配所の月を眺めて居る。夫人は四児を伴ひ苦痛と戦ひつゝ、当地に転住せしめられたと同時に基督教に凝り初めて感謝の日送りをして居た。夫れは無難であつた。近頃では暑さの故に殆んど狂信者になつて心の中を幻を描き倒れた人々には判出束ぬ様な行動を取る様になつて来た。誠に同情にたえぬ家庭的悲劇を生み出して居る。水泳場の傍にある土山に登つては太陽を拜んで隨喜の涙を流したり水の流氷を凝視して悪魔の世界を描き自個の靈の力に依つて此を退散せしめんとする。努むる夫人の姿を眺むる時一体誰の罪なりやと考へて見度くなつた。何卒一日も早く眞の信仰に目醒めて頂きたいと念願するもの。私一人ではあるまい。お互に開眼のある生活に恵まれ居る。斯る機会に信仰上の疑義を明確にして嚴然たる信念の上に培れたる信仰生活に生ずる可く専念すべきだと思ふ。安價な信仰は動もすれば取返しの付かぬ狂信者を生み出す。悞れがある。特殊な生活を強要せられ居る吾々の大いに留意すべき事だと信ずるが故に秃筆を呵した次第である。

人生の目的

長谷川生

人生の目的には二様の見解がある。第一には何故人生を享けたる。即ち假りに造物者なる神ありとすれば神は何を目的

として人を造りたるが。第二には既に生れたる吾人は何を目的として人生を送る可きか。萬物は唯だ造物者の意のままに其生を享有せんと智能ある人間は自ら又別種の目的を感得するは理の当然であらねばならぬ。

第一義に於ける人生の目的は總ての生物の目的と等しく其同種同族を此世界より絶滅せざるため否益々繁殖せしむる中絶者として存在するものなることけ明かである。之れ人間に男も女性ある所以にして植物の花を開くも動物の悉く蠢動するも人間の應を感ずるも皆その存在の意義を完ふせんための原因に突するものなること論をまたざる所である。

第二義の人生の目的こそは普通人生の目的として一般に論究せらるゝ所のもので稍々難解の問題である。人は何を目的として生存すべきか。富が名誉か唯快樂か。富貴素より人類の欲求するものなることは明かなれどトルストイは其晩年に富を分散したるにあらすや。大西郷は明治初年当時日本唯一の陸軍大將たる栄冠を擲ちて故山に還りたるにあらすや。所詮富貴と雖もその心に満足を伴ふものにあらずば何等の價値なきを識る。貧を憐み孤を恵むは快は快なりと雖も一盞の美酒を捧げて清風光月に対する時と孰れぞ。快樂に種々あり又程度あり果して奈何なる快を以て目的とすべきか。要は畢竟自己を最も満足せしむるものを以て標準となすべきのみ。論じ来れば決極人世の目的は自己の満足を得るに帰すべきが。

然れども満足は欲望の達成に依て生じその欲望は一にして足
らず種々企劃しその慾求又度を識らず一をなす遂に是は則ち
又他を想ふ。斯くて人生遂に意のき、ならず徒て大満足は極
めて得難し。嗚呼億万の年の宇宙に只だ短き一遍の人生を果
して奈何にすべきやに迷ふ。宗教は因て起り精神修養の必要
は茲に起る。
而して顧るに現在の我朝夕唯だ食するを待つて時を消費し
終日一卷の書をも読まずして是れ眠る。噫々我人生の價値果
して何処にや求むべき。

偶感

峰南生

愛別離苦の思の深く
悲むまじき身を嘆き
我も心の闇深く
輪廻の波に漂ふ
生々世々といつまでも
思ひの絆ながき世の
苦しみは海に沈むとかや

七夕も年に一度は逢ふものを
如何なる縁のうすきにや
語らふ重なる憂き枕
月は照らせど破家の
床をてらして淋しけり
かとなふものは朝夕の
涙音高き飛行機と砂埃吹き卷く西風
誰と談らふ春の夜に
膝より他はなかりけり



安井騎兵

先日突然お伺ひ致しまして失礼致します。あの方は温かいお言葉でとても元氣になつてしまひました。心から感謝して居ります。先生もさぞかしお忙しう申し訳ありません。先日は色々とお話を伺ひました。人を憎んでばかり居ては駄目だといふ事がよくわかりました。もつと早く氣が付けば良かったのに。何でも反抗したくなつて人を困らせてばかり居りました。でも小さい時は良い子だつたさうです。自分でも申しますと変ですが母は「小さい時は外の子と違つて一すも手がかりをなかつた」と申して居ります。今ではとても手が掛らない所ではないでせう。

姉兄達は小さい時家が裕でしたので近所の子供と遊ぶと良くなつたと云ふので遠くの學校へ通ひ少し出来の悪い學課がある。とすぐ家庭教師について勉強した様ですが私の五才の時頃家は急に貧しくなり私は幼時粗末な小さい家で育ち學校も〇〇へ入りました。今迄近所の子供と遊ぶとすぐ姉達の家へつれて来て終ふので不満に思つて居た私は小學校がとて面白く思へました。しかし家が人であふれて居るために家で

一字も勉強しませんでした。一年から四年まで首席で常に
長でいた。たい姉達がやかましく友達のことを云ふので外で
あつたことを決して家ではいはないで嘘ばかり云ふ様にな
りました。そしてそれが成功した爲め今では大變な嘘の天才
なつてしまひました。

父は頭の良いい心の大きな人でした。貪しい人
には高い藥をドンドン與へて病氣をなほして上げました。高
賣上あまり暇がありませんでした。無口でしたので私は父を
遠くから尊敬して居りました。

母は一日中一人で働き通して子供と遊ぶ時など一度もあり
ません。姉達は私をあまりしたあつひにするので私は快
く思ひませんでした。それで私は外を愛し友達を愛しました
所が三年の頃父が死亡し家が何となくゴタゴタして来てま
く家がつまりなくなりました。

私の四年の末に首席のはずの私が何かの間違ひで三番目の
生徒が私の分まで表彰されてしまひ、後で主任の教師は大變私
に謝罪しました。私は別になんとも思ひませんでしたが家に
飯つてついでに口を滑らせてしまひました。すると二番目の姉が
學校へ行つて怒つて来て、私は姉の云ふまゝ或る學校へ転校
しました。所が御存知の通り程度に大變な差があり學校だけ
で勉強する習慣になつて居た私は暗い淋しい家で勉強する氣
の起る筈がありません。勉強が面白く無くなり物質的にも困

つて居た頃の私がどうなつて行くかおわかりになるでせう。
殊にあの学校は高級な者ばかりの学校です。私は級の一番上
から一番下へ落ちてしまひました。友人も出来の悪い困りも
の生徒ばかりになりました。又あゝいふ学校は富んだ家の
生徒と貧しい生徒の取扱ひの差がひどいのです。母校の悪口
を云ふのは嫌ですが本當なのです。或生徒は「私はこれから一
週間はお休むをしても大丈夫よ。だつて昨日お母様が先生の
所へ行つたんです」と申した程です。私は出来が悪く悪戯
で食したので先生に叱られてばかり居ましたけれど家へ飯つ
て食しさと戦つて居る母や姉達には何も申しませんでした。
やがて六年になり上級の学校へ進むことになりました。多く
の生徒は出来がいいと云ふ顔をして私を見下しました。
所が先生がメンタルテストを致しますと優良な生徒たちは
あまり勉強し過ぎて頭が痛くて居ると見えて誰も全部出来た
ものはなく笑はれた。私一人が皆出来てしまひました。それ
私の頭が良かったのぢや無くて頭が空いて居たのだと思ひま
す。私はその頃からもうづつと頭が悪くなつて居たのです。
何を考へても良くわかりません。だんく馬鹿になつて
今では兄や姉に馬鹿にされて計り居ります。そのメンタルテ
ストの結果私は先生や生徒に大変な目で見られました。其日
私は校庭の隅の大きな石の蔭で生徒達が飯つてしまつた校舎
をどんなに悲しく又くやししく眺めて居たでせう。夕暮のせう

る中で何度か校舎のもえるのや心の中に見えました。私の氷の様なそして火の様な胸の中。こんな事を知つて居るのは私とその大きな石とそして今これを読まれる先生だけです。こんな事を考へたからと云つて私を危険視しないで下さい。でもこの事が私に大きく響いて居ることは確かだと思ひます。こんな事を認めて私の反抗心は立派に出来上り性質も見事にひねくねてしまひました。ハイスクールに入つてからは小学校の時の不公平に對する不満があつた爲正しい人にならうと入学した日びら一生命でした。が私がひねくねて居たし反抗心が強かつたので誰に對しても一本氣でドン悪い事をその人に向つて云ふので生徒も私を不良だと云ひ先生も私を憎みます。それで良い人にならうと思つて居るのに不良扱ひにされた。それがとても惜しくて仕方ありません。氷るのがとても惜しくて仕方ありません。学校ではこんな風です。家は家で大きい姉があまりない。家で中がいつも休みなくもめて居ました。その事はとても説明出来ません。何しろ外で考へる様なやさしいものではないのです。五人の兄弟と母が皆一人々々我こそはと思つて住まつて居るのです。今でも大きい姉が居りません。矢張り暗い家庭です。色々な事から考へ初めた結果世の中は眞面目に歩いてたつて仕方がないと考へ不良だと云はれるなら本當に不良になつてうんと皆を困らせてやる様な悪い人間にならうと思ひ誰にもそんな心の事を相談する人がなかつた。

ので考へるとすぐ実行しました。まづ不良の友を得て何度も
家を飛び出しました。私がたうんと悪い人になることのみ
を考へて居ました。が母や姉や教師達は私がその友達になつた
男の人が好きで家出したのだと思つたのです。私として見た
ばその友達はただ悪くなるための第一の入口に過ぎなかつた
のです。私の姉達でさへ二十二三才になるまで性に關する智
識を持つて居なかつたのに、その頃の私の何んでも知らなかつ
私はただ異性も友達と見えただけで、何んどの事かは知らなかつ
たのです。それです。のちに早熟だの、何んどの事かは知らなかつ
上の姉等は結婚させた方が早いといふと、かゝる騒ぎをし大勢の知人へ
悪い人に成つて居るのだといふと云つて大騒ぎをし大勢の知人へ
私が不良だと云つて歩いてたのです。私はその時十六才でした。
口には出して申しませんでした。が親兄弟が見ると本當に嫌な奴な
と何度か思ひました。母や姉は私から見ると本當に嫌な奴な
のです。私としてはその時私の頭で考へて一番良いと思つた
事を一生懸命やつたのです。今考へて見ますと馬鹿らしくて
どうしてあんな事を考へたかと思ひます。
其後すつかり弱つてしまつて私は一年位靜かな所で休みたか
つたのです。が夏休みがすむと姉達が又前の人が好きになると
いけないと云つて、学校に入れました。其時の私は何の考へ
もなく本當にボンやりして居たのでした。が家では私が一す
も目を離さないで学校の行き取りまで細かについて居たので

す。私はもうそれが厭で嫌でたまひません。それでつい出た
らめな事をして騒ぎました。が先生方の考へて居られる様なこ
とはしませんでした。私はとても先生方から悪く取られて居
る様ですが實際はあの時只二三度の店へ行つた位でした。
あの時私は何をやる氣にもなく只母達の私に對する目が口惜
しくてその爲見るもの氣に障つてイラウして居たのです。
それがらだんく氣持も落ちつきもつと善い人になりたいと
常に考へて居りました。けれども又反抗心もあつてとても苦
みました。善い人にもなりた。けれども悪い人にもなりた
い。何方が良いかと独りて苦んで居たのです。一寸考へると
何でも悪い人になりたいか變ですが、本當にそれで惱みました。
でも今ではもう善い人になりたいだけです。今度家に居ると
ても考へました。が初はただイラウしてあせつて居ました。そ
の申自分の心を正しくしなけれは何も出来ない。と氣が付いて
先生の所へ伺つた訳です。
今年の夏休みには本當に苦みました。家の人々は「こんを事
になるのは貴女一人です」と云つて毎日せめます。私は私で
色々なことを私の馬鹿な頭で考へなければなりませんでした。
おしまひにはボンやりしてしまひました。それが通りこすと
今度は落ち付いて正しく考へられる様になりました。そして
前もさうでした。が何かして居たいのです。と云つて又自分の
やりたくない事をさせられると決して致しせん。家の人は

私は馬鹿だからハイスクールさへ出せばそれでもいいと申しま
す。でも私は私のしたいと居ることです。自惚れて
せてくれたならきつと出来る人だと思つて居ます。居りました
居る様ですが今まで自分でもあきつぽく困つて居りました
が自分のしたい事が委された時きつと自分でも驚く程一心に
やりとげました。でも何時かは相変らずあきつぽく小説を読
んで他の事を考へて居て何度か読み返さなければなりませ
ん。これ兄弟に馬鹿にされる一つです。自分でも自分を馬
鹿にして居ます。精神を集中することが出来ないのです。
姉達や母は私が何を考へ事を打明けてもその時は一時の感情
で何でも考へ後でもう一度尋ねるともう變つて居て少しも頼
りになりません。そのくせ私が一人でする事を止めるのです。
今でも一人で遊びに行く嫌な顔をします。心配して居るの
です。よつて心配する方がどうかと思ひます。私だつて赤ん坊
ては無いのに。今度も姉はすぐ転校しなさいと言ひました。が
良く考へれば転校すれば又費用がかつて後では思ひます。し
私とても転校して気を使つて校風が分る迄勉強も思ひます。出
来ません。で肩身のせまい思ひをするのは嫌です。それにも私
明るい学校が好きです。です。から姉が何んと云つても私に
云ふことを聞かないで自分の思ふことをします。云つても私に
強くて一寸とも理智的に物事を考へないのです。私も姉を馬鹿に
して居ます。心の中で。

下らないことを永く書いてしまひましたか書きたい事はも
 つとく沢山あります。でももう止める事に致しませう。今
 の氣持はもつと善い人になりたいといふ事と私の希望がな
 つたならといふ氣持です。もう今の望は私の境遇では駄目
 すから諦めます。何んですすが変なお手紙になつてしまひ
 したがお許し下さい。今迄誰にも申しませんでした。先生が
 私を理解して下さい。お願ひです。お話を書いて仕舞ひました。
 どうぞ読んで下さい。お願ひです。何時頃かよろしいでせう
 はせて頂きたいと存じて居ります。お願ひです。何時頃か
 がお手数でせうがお葉書下さいませ。

十一月十八日

安井先生

。。。。子持



病氣見舞に就て

赤十字社
松村いめ子

病氣見舞……病人にも色々ある。男女老幼の別……又病氣の種
 類にもさまざまある。本人が病氣に病氣見舞の挨拶の心得べき事
 につて居る方が都合のよい病氣病人を慰めることを目的とすべ

もあり本人に知らせるに忍び
 ないものもある。従つて病氣見
 舞の挨拶も勿論一様にはゆかな
 い。臨機應變……謂はゆる應病與
 藥的に人を見て法を説かなけれ

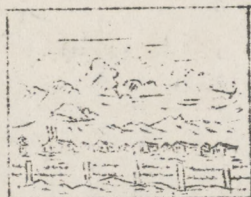
きは言ふまでもない。その家
族：夫なり：親なり：子なり
をも慰めるといふことを忘れ
てはならない。

親しい友人を見舞に行つた

時は

花子さん如何：今日はお氣分
はどうだかこの前に来た時
よりとてもお顔色もいいわ

し上り物はあす、みになつて
「え、食慾も出たのぞ」まあ水し
い：それで營養も良くなり熱は
下つて程なく全快といふところ
になるのよ。病氣なんかは負け
てたまふものかといふ様に氣を
大きく持つて下さいといふ風に
氣分を多少なりとも朗かにさせ
て上げるのである。完



ポストンの地質について

此の辺のポストンといふ名称は近々八十年程前につ
けられた名であります。地質上から考へると此辺り
は非常に興味があります。太古は海で氷河時代ノキシコ湾の海水
は此の辺へ来て居たもので其海底が地変のために盛り上つた
ものらしい。それ故今この附近から其時代の海の動物や貝類
海藻等の化石が出て来るのであります。

其後何度の地変があり口ツキ方面の大洪水が来て長い
年月河流でありました。そして其河即ち口ラド河は石鑛物
土砂塵埃あらゆるものを流し運んで推積に推積を重ねたもの

でありす。第三キャンブの東南の井戸は六百呎採掘し
 たが水質悪しくオリの様なものが出て臭気があるの
 で飲料とならず。此は農耕用の灌漑に使ふことになり
 ました。つまり六
 百呎では河底の堆積物の途中で所謂地面に到達しな
 いのでありす。それと良質の水を汲むために館府の西
 北三〇六区の傍に更に千五百呎の井戸が掘鑿せられ
 ました。吾々の飲料水はそれでありす。以前は山の麓
 まで水があつたものです。が今は一望の砂漠となつて
 居るのでその水流と土地がどんな風になつて居たもの
 かを一つと研究しなうでははつきりした事は解らない
 のであります。今の第三館府から近くに見える吾々
 が俗に黒山と云つて居る山あれは元から存在して居る
 山である事は全山が地面の底の石でクラネト(砂岩)といふ
 石でありますから地面の深い処から来て居る古い山といふ
 事が確かなのであります。此の山には鑛があり少し
 離れた所には金鑛の跡がハッキリして居ります。ずつと
 以前此のポストン附近は砂金の産地であつた事はアリ
 ゾナの歴史にもあり、ゴウド河にはゴールドが大層多く
 又地圖を拡げてこの河の流域を一瞥すれば蛇蛭として
 鑛物の豊庫を洗つて居る事は瞭然として居るのである
 事往時のゴウド河の堆積地たる峽の辺りが鑛物の豊富
 である事は充分に皆が知るわけでありす。併しゴウド
 河の多年の極まりなき氾濫と今から四十五年前のグム
 の築工で水流は移動してしまつたのであります。

もし諸君のうち誰かが昔の流域の跡を探し當てたならばどんな宝が埋没されて居るかわからないので必ず金塊を拾ふ事が出来ると言ひ傳へられ居るのであります。何吹堀れてゐるが。いいものは重いから下へさがると云ひますが所によつては十吹或は百吹掘れば掘り当るかも知れないのであります。高い所から見下して大体の見當をつけて掘つて見ても面白い事と思ひます。

中道道夫氏より資料を頂きましたことを深謝致します。

子供の服場を見ても
峰南

あゝ愛らしき奴
如何に汝は高きに登りたるか
その高きに登りたるに拘らず
束の間も休まずして
能く勵むことよ
人は誰もたゞいさゝかの
名誉と財身につけは
急り勝ちに誇り居る
汝はそれにならぬやらず
たゞ教へて能く勵む
汝を愛せざるを得ない
あゝ愛らしき奴
服はて居るの
下へさがると云ひますが所によつて

民謡

象徴節

山北凉水

砂塵高くアリゾナ州のホーストンに
建ち並びたる牧場所
二万全人の同胞が
悲憤の涙おし隠し
此所が舊しの他に住居
夜半に飛び来る飛行機は

懐かしき故郷の夢破るはどん
金塊を拾ふ事が
何吹堀れてゐる
下へさがると云ひますが所によつて

あゝ愛らしき奴
如何に汝は高きに登りたるか
その高きに登りたるに拘らず
束の間も休まずして
能く勵むことよ
人は誰もたゞいさゝかの
名誉と財身につけは
急り勝ちに誇り居る
汝はそれにならぬやらず
たゞ教へて能く勵む
汝を愛せざるを得ない
あゝ愛らしき奴
服はて居るの
下へさがると云ひますが所によつて

つたらと思つて二人の水泳着を持つて来てありますのよ。それ
に水近頃聞いた事ですけ水どあの病院の向ふに大きなスイミン
グプールが出来たのですつてこうした小さい事も天に語つて聞
せる信子であつた。信子は健二の健康になる日を思ひ浮べ、亦
過ぎにし年健二と共に一と夏を過ぎた故國助川海岸を懐しく
思い出した。熱砂飛ぶ此の沙漠にも初秋の涼風が心地よいま
でに肌をかすめる頃であつた。二人は夕食後の散歩によくノ
スキート樹の間を逍遙した。或る夕であつた健二はノスキ
ート樹の切り株に腰を卸して黄昏時の館府の風景を遙かに見下
してゆ々言つた。静かだわ。乳色に包まれてゆく館府の夕景色
が見えて丸で絵の様なわ。配所に在る身も忘れたかの様な静か
を二人はあわず眺めた。配所に在る身も忘れたかの様な静か
な心境にて虚しく二人は黙禱した。信子は静かに歌ひ出した。
人生行路の歌を。透き通る様なリズムは静寂な餘韻を以つて
あたりの木々に響いた。健二は信子の歌ふのを聞くのが何よ
りも楽しかつた。信子は健二の快復を只管祈り続けて出来る限
りを盡した。あゝそれなのにノスキートの細い葉が黄ばんで
吹く風毎にバウくと音も淋しく散る頃信子の只一つの希望を
裏切つてとうと淋しく逝つた人の命の儚さを今更知つた訳
でもないが人生の無常に夜も盡も泣いた。泣けく涙のなくな
るまで泣きなさいと先輩の方の慰め言葉を肩越しに聞き乍ら泣
いた。併し日数の経つにつけ世界動乱館府生活子供達の養育

等をよく認識して何時までも女々しく悲んでる時でない事を
考へさせられた。我が行く先きに如何なる困難があらうとも
敗けてなるものか。希望を以て子供達のために強く生き抜こ
うとする現在の信子である。懐しい而して悲しい追懷からフ
ト我に歸つた信子はオ、オ、オ、もう着いた頃と思つて首を上げて
自分のブラウグに曲らうとしてハッ氣がついた。ア、違ふわ、何
処のブラウグかしら考へながら来たので家を間違へたと思つた
ら暗がりの中で急に顔がホッとして赤くなつた様に感じた。誰も
見てないがしらと思つて薄明るい星明りを通して見たがあた
りに人影が見えぬのでホッとして急いでよその家の前を通り越
して次の道に出た。二三ブラウグを間違へた事に気がついて声も
立てずにおかしたにフ、フ、と笑つた。飛行機が勇しく爆音を
立てて頭上を飛んだ虫の啼く声が或は高く或は低く訴ふる如
く慰むる如く初夏の夜の微風を縫ふて流れて来るどのブラウグ
からか人生行路のレコードが聞えて来る。
鼠吹け吹け人生は
いつも荒海ひけ模様
引いちやなろうか此胸に
赤い血潮のある中は
晴れてゐてさへ人生は
心次第ですぐ曇る
敗けちやなろうか男なら
晴れた青空見るまでは(完)

和氣湖月氏御執筆の蜀山人片語は紙面の都合上次号に掲載
する事に致しました。

飛

譯

日本人の妻

レイモン・ド・クロムリー

著作者照付

氏は“WALL STREET JOURNAL”の極東通信記者として千九百廿六年東京へ赴任し東京に於て偶々今回の突発事件に遭遇したものである。東京赴任直後日本の一女性政代と國際結婚に結ばれ一子をを得。日米戦争勃発當時より六ヶ月間廣北の身として日本で收容所生活をなし、交換船の便を得て帰國、現在“WALL STREET JOURNAL”本社に於て勤務中、年齢卅三才、加州ロングビーチ市出身。

譯者記す

戦争は人類發展上又國家の福祉増進の上に於て欠ぐべからざるものとされて居る。而し戦争は人類極致悲惨の曲である。その戦争の裏面に於てはこゝに綴られた一文の如き幾多の葛藤史が到る処に演ぜられて居る事實を私達は常に見るものである。國際結婚なるが故に妻子と別れ父と別れ母と分れ別々の道に向つて生きて居る。戀愛は一面人生至上のものである。これも知れぬ。戀を得愛に生み共に契りそして世に処して行く。これ國際の如何を問はず人類を問はずそこに何等の差別はない。一旦こうした不幸事態に遭着して憂鬱極りなき社会層を凝視する時、こうして國際愛に結ばれた者達は一般人から一

種違つた辟目で見られ、見なければならぬ事実を知るの
ある。國際結婚なるが故に生じたこうした事實が、この転住所
内でも亦尠くないと思ふ。私はこうした意味に於て幸ひこの
稿を得一文を記してみた。又國際結婚が如何なるものである
かを知るためにも。

20

私は東京で十二月八日、日曜午前八時頃鏡の前に立つて顔を
剃つて居た。妻の政代は台所で朝飯の用意に急がしうであ
つた。二時半になる子供「ダ」は自分の部屋で遊んで居た。妻
は朝のレデオにスイツチを入れた。刹那彼女はやはり鳴咽を続けて居
終つた。私が台所には入つた時彼女はやはり鳴咽を続けて居
た。彼女が一月も前から最も恐怖の念にかられて居た事件
が、今日のあたりには勃発したのだつた。何が？戦争！然も日米
間の！！私は顔剃りを終へんと鏡の前に再び立つた。妻を一應
慰めてもみだ。幅漙した幻想が走馬燈の如く胸中を去来した。
明らに外國新聞記者だつた私は、虜にされて終つたのだつた。
米國大使館に逃げ込もうか？時遅し！！その時表玄関の扉は外
部から錠がかけられて、新聞記者たる履屋を以て
三べりやへ逃避し本國へ飯還しようか？否！妻と子を捨て、
それにも到底出未得ない！！咄嗟にそうした夢想も考慮の中から
取り去られて終つた。その時最早玄関で警官の姿が見へ出し
たのであつた。妻は玄関前で或男に呼び出されて居る刑事ら

しい。私が急いで着物を着て居る中にもう二人の警官が私の家の裏門に廻つて居る。私がネクタイをしめて居る中にこの三人の者達は最早や私の寢室に迫踏み込んで来た。私はそればかり偶然であるかの如く警官及び刑事に向つて朝の挨拶を云つた。本官と同行を求めたい署に来ればすべて了解出来るだらう。とその中の一人が答へた。私は同行せざるを得なかつた。次に来る六ヶ月の私の生活はこの上もなき艱難なものであつた。私はその間監禁同様であつた。スパイの嫌疑を受け終始継続的に苦められた。又監禁中殆んどの場合私は空腹を感じて居た。時には風邪を引き病氣にさへなつた。而し苦しいこの試練は悪遇及び身体上の苦痛から来るものではなかつた。唯一つの原因それは相思相愛の中にも日本の女性と國際結婚をして居ると云ふ一種の不安から来るものであつた。

私は昨年十二月八日戦争勃発當日迄の私達の結婚生活に就て一應説明せなければならぬと思ふ。

結婚後の私達の生活は外の誰もが経験出来ぬ程完全に円満であつた。私達は國際的にも人種的にも相違して居た。而し夫婦愛の上には何等の缺陷を見出すものはない。私達の口はマンスは一回の面接が始まつた。私が新聞記者として日本へ赴任しまだ一ヶ月もたつたない千九百廿六年の或日曜の夜輕井澤の避暑地より東京へ向けての帰途であつた。當時私はまだ齡廿五才の若さであつた。汽車の中は週末旅行を終へ

て東京への飯途にある避暑客で一杯立て込んで居た。車中で
 あちこち見廻して居る中に頭上の網棚から旅行背嚢を降して
 居る一人の女子大生徒を私は見出した。彼女の愛くるしい黒
 い瞳、美しく均整の取れた彼女の姿体は私をして懺殺せず
 はをがなかつた。私は彼女が私の母に似て居る様に思はれた。
 私は面会を申し込むのに如何なる方法とればいいかに迷つ
 て終つた。何分間経つたであらうか？私は吾知らず巻一の小
 学読本を取り出して居た。周囲の人々はこの外國人の男が小
 学巻一の読本を取り出して何をなすであらうかと不思議な瞳
 で以て自分を注めて居た。私のこの冒険は見事的中したの
 だつた。何故なら私は彼女に難しい字句の解釋を教へてもら
 う事に成功したので。

二

こうした事實が私達を親密になす第一歩の手段であつた。
 而しこの交換教授には尠からず困難があつた。政代の英語智
 識は狭部分の範圍内に限られてゐ、又私の日本語と虽も全々
 解する事が出来なかつた位であつたが二人は手眞似口眞似で
 お互に理解出来る様に力めた。政代は当時東京の女子帝大医
 專の学生であつた。その後私達は屢々お互に会ふ機会を得た
 が私達は余りバレーテイには行かなかつたが映画及び歌舞伎
 はよく出掛けたものであつた。映画を見ては何等得る処がな
 いけど歌舞伎を見て居ると何ん

だが遠い昔の氣分に浸る事が出来るんぢやないの」と云ふ様な事をよく言つては好んで見物に行つたものである。

三

過去を顧ると二人で散歩した時の想出がありくと追つて来る。或時青い野原を散歩して居る時道の繁みの中に咲いて居た小さな青い花を指差して「この花私の好きな花の中で一番好きなんですの。貴方お嫌ひ？」

噫！私け一生あの小さな青い花をどうして忘れる事が出来ようか！政代のみが持つ事の出来る象徴であつた。私達は紫色の色に黄昏る、夕靄の丘に佇み暮れ行く小さな街の灯を眺め乍ら幾度となく私は彼女に求婚した。十四、十五、二十回それ以上。上に彼女は永い間黙考し一語をも発せなかつた。遂に彼女は言葉少なく静かな口調で「貴方日本人がお嫌ひぢやないんですの」と私に聞いた。これには尠からず面喰つたと同時に私にとつては非常な難問題であつた。如何なる返答によつて彼女の理解を求むる事が出来るか苦しむなければならなかつた。私は「日本政府の方針、軍部及び警官は嫌ひだ。而し普通の人は大好きだ。丁度私達も他の何れの國の人を愛する様にと私は答へた。政代はその夜私に約束してくれた。彼女は私と結婚せんが爲に家族の同意を得ると叔郷した。彼女の父は郷里で医を営む封建的な男であつた。両親及び彼女の親族は皆大なる拒絶をなした。而し私自身について余り攻撃しなかつ

た様であつた。寧ろ外人であり大學卒業と云ふ私の履歴がら
して多少の期待はかけて居た様であつた。然し私はやはり一
個の外國人に過ぎず日本の上流社会の作法によればその家族
の一人が外人と一旦結婚すればその親族全部の「顔潰」であつた。
医者となつた政代に對しては両親が政代と同階級の夫を見出
す近家に居てもらひたいのが両親及親族一同の同一意見であ
つた。

24

四 政代は自分の意見を個守し両親及親族の反對にも拘らず充
分確信を以て再び飯京して来た。それら間もなく私達は結
婚した。私達は家具を五部屋付きの純日本家屋を靜かな東
京郊外に借り受けた。坐蒲團の上に坐りお膳の前で食べた。
私はこの日本様式が非常に好きであつた。一方東洋風を研究
する上に於ても、私達は或日家具店を見廻り必要な家具を求
めた。家具はその夕方配達され政代の眼は喜びに溢れ都合よ
く家の中に配置した。長い間立つたり坐つたりして喜んで居
た。こうまでして喜ぶ政代の姿を見て私は彼女が如何に西洋
の家具に憧れを抱いて居たのかも目の辺りばかり見せられ
のだつた。又政代は日本の傳統的着物を排して好んでドレス
を着て居た。又彼女は好んで白人の名前をつけた。自分の名を
「マジョリ」と呼び米國へ行ける機会のを待つて居た。私の
友人は私達の間に夫婦喧嘩云々を尋ねるものや居たがそうし

た質問は私達には無用なものであつた。私は妻を日本人として考へた人はなかつた。私は唯一個の日本女性として又自分の愛する唯一人の妻としてしが考へて居なかつた。又或る友人は一旦結婚して終へば日本の女性は大に従順にして御し易き女ではないかと聞く者も居たが若しそれ事實であるとするれば私の妻の教養智識の全部を覆ひかぶせてそうした理論を弄する事を止めさせなくてはならぬ。私は或時こうした理論を研究して見た。而し私に対する妻の行動は結局それを裏書きするものに過ぎなかつた。妻は私に味噌汁の作り方を教へて呉れた。私は妻にライスプディングの作り方を教へた。二人の結婚生活はこうした日々の些細事に迄その樂しさは横溢して居た。彼女が最初「ライスプディング」を食べるのを嫌つて居た。而し遂に彼女は毎朝入浴した。風呂場の壁に洗濯物等が桶を土間に据付けて毎朝入浴した。風呂場の壁に洗濯物等がほしてある。私の風呂場教育である。私は入浴中幾度もそのてくられた。私の風呂場教育である。私は入浴中幾度もその漢字を読み覚えなければならなかつた。寒い朝漫々然として風呂に浸つて居ると政代は台所から漢字を忘れない様に眼を注意して呉れた。當時私は新聞記者として終日お互に急ぐ医として朝早く出勤し私は新聞記者として終日お互に急ぐ働いた。夕方になると私達は何時も家で二人きりになる事が出来た。夜は大方家に居た。或夜は政代は當時私が従事して居

た日本古歌の翻譯を手傳つて呉れたし、或靜かな夜はよく蓄音機を鳴らして音樂に樂んだ。「國際的問題に及んで議論する様を事はなにかと聞く人も居たが一度もそうした問題について口論する様な事はなかつた。新聞記者としての私はよく國際的記事を集めて家に持つて飯る事があつたが政代はよく理解して呉れて居た。彼女はよくそうした政治的記事を読む事があり、記事に相當深い關心を持つて居た様であつたが決して實際的問題に就て論ずる様な事はなかつた。夜更けの眞夜中―何時迄も寢もやらず幾夜となく日米間の不安の狀態を察じてか深く考へ込み向々として居る様であつた。唯一度大口論した事があつた。それは私は子供の教育問題及び其方針に就てであつた。唯お互に意見の相違を見たためであつて決して重大視すべきものではないなかつた。そうした幸福な夢を見て居る様を結婚生活が続いて居た折、突如、眞珠灣爆撃、その間彼女は涙で濡れた顔で玄関前に佇んで居た。私は之等三人の者達により引致され、調べられ、所轄警察署の未決監の中に投り込まれた。その夜典へられ、たものは唯一杯の飯、終日未決監の中で暮し、だが私は政代からの差入れは許さず居た。夕刻になつて端緒の評問を受け、一時放免され、私は毒は警察車に乗せられ飯途についた。車の中で「不語の護衛の警官から警告を受け、お互に身体をくつけた儘心の中で元氣づけ下ら一語も話し得なかつた。(以下次号)

父の日の歌

山邊の谷磨

一
徒手空拳

意氣高く

理想の一步踏み出せる

中に勤勞の一筋に

悲壯の首途 思ひ見よ

あゝ 開拓者 今いづこ

炎熱 凜寒 みるみなく

二
櫛風沐雨 たへしのび

排作さへも物とせ

眠る富源を拓きたる

あゝ 先覺者 既に老中

三
農水産に 斬然と

風に獨歩の位置を占め

技能の巧み

功績の 譽は永久に輝かん

あゝ 老ひし人 ほとゝみぬ

四
千古に誇る民族の 使命果たさん

奮闘の

勞苦の裡に育まれ 世に出で立ちぬ吾等 今

あゝ 誓はなん 父母のため

此の歌には音譜あり。作歌者山邊の谷磨氏は七十余の高齡。鶴の如き煙艇を持して、冒険身キヤン。アトリト哩二十哩の山を跋渉。数日の間、山麓を渡る事も多し。體を録として、壯者を凌ぐ概あり。六月二十日父の日、近しとしてこれを寄せしむる





落ちゆく陽

岩橋弘

黒き連山に
高く聳えて見ゆ 山頂に
真赤に焼けた夕陽が
刻一刻と沈みゆく

黒きバラックの壁に
細長くつゞいて居る電柱に
淋しい一日の名残りが
沈みゆく夕陽とともに
薄らいでゆく

誰一人語る友無き我れ
ルームの入口に佇みて
一日の疲れを休めつゝ
静かに落ちゆく夕陽を眺む

わかれ 鈴川愛子

先頃三つ九の夜堂に於て開かれたる塩崎夫人の
大層の許、デキヤス州インタニートキヤンブに赴か
る、婦人会主催の送別会の席上にて一同
合唱(童の光の詩)して涙とともに惜別したるもの

睦みし月日限りとなかり

明くれは君は旅の空

尽きぬ名残惜しみつゝ

部落挙りてこの宴

うたけ

試煉

女の靴は辛くとも

共に進まむ屹然と

即自重あれよ

いささらは



モハベ
俳句



四季雜詠

湖月編



五十住靜遊

漂へる柳絮に返子は隠れけり
釣人や脊に柳絮を負ひながら
箱庭や石の配置の巧みなる
行く度には不潔なれども釣樂し
ふらこゝや高ゆれを以て母を呼ぶ
ポストンや糸遊も見お夏に入る

篠田香虎

葉柳やコロラド河は湛ふたる
糸瓜咲く窓あけてある伏屋かな
泳場や見張り櫓の救護班
萍を程がせ居るは小魚なる
園丁の芝に水打つ長ホース
夏川や浅瀬を鯉の遡る
安川不似郎
ノスキトの花啄まみて轉れる

29

ノスキドの花揺り落し轉れる
轉りの去りし梢やゆれてをり
轉りの飛び行く叢は花セージ
葉柳のへなく影や鴨の水

小田華泉

黄昏る池に夏虫すたき居り
蚊食魚露天映画をかすめ飛ぶ
洲に遊ぶ人夏川を渉る
煽風機や鏡に向ふ洗ひ髪
埃り風まともにも受けて日今人
電線の山に入るなる夏野かな

長谷川蒼逸

藍に似し青葉の下の谷の水
瀬々らぎを上る小魚や川涼し
吾が庭に夏蟬一つ黄昏る
葉の蔭に晝寝のやうな甜瓜かな
その家の誇りや高し鯉哉

モハベ今大和人住み風董る

大熊寒山

うら、けき湖の面や遠く野鳩啼

野遊児の鶉追ひ行く森の中
收容所の児に一ト年の端午かな
野遊人に鶯啼き行けり空うら
復活の聖歌了へたる旭の出かな

小林千代女

羅に浮きひろがりし下模様

自動車の見えかくれする若葉を

日焼娘の集る川畔風董る

まだ青きレモンの籠を貰ひけり

畫時の鉄の音や庭長閑

山北凉水

朝顔や葉蔭にひそむ虫動く

收容所の大路に小路にトノト

春愁や妻の遺せし草の戀花

初恋の娘に收容所の木の芽かな

春宵のとなりのおに之渡れけり

砂朶や新樹の下の池の鯉

田中白水

樹に懸けし水囊満き夏の宵

今朝見れば瓢の蔓は軒にまで

花生けて妻の笑顔や風董る

復活の讚美歌和ごむ館存かな
釣竿に並ぶ蜻蛉や眞晝時

青柳落葉集

伸び上り伸び下り軒の大糸瓜

撒水や暮れ行くまゝに夕涼み

條に咲き輪に咲くベチユニヤ寺の庭

曇るまゝキヤンプ風き居り展墓の日

吉井夢太

夕涼や砂路の小石拾ひも

メスキドの豆莢堅し青嵐

いそめる習字の子等に火取虫

晩学の額の汗や絵を習ふ

花ひそむ茄子の下葉の大いなる

風戸登代子

ホストンの風のなひきや鯉のぼり

鯉幟配所の空に手を翳す

ホストンの空はれくと鯉のぼり

末本生

おんくと乙女伸び行く新樹かな

月影に唄やく乙女園の春

迷ひ人探す人ある焚火かな

山根愚公

ポストンの芝生に伸びて月涼し
挨拶も致に追はれつゝ家内に入る
句作する考にブラクの庭涼し

鍵和田閑保

調ひし棚に夕顔夢らす

領中合ひし家族の卓の初胡瓜

和氣湖月

甜瓜のなる喜びに住む庵の主

朝戸出を甜瓜に佇む主かな

春窓に隔離の月のさしにけり

△ポストン文藝五月號

五十住 静遊

俳句拔集

釣人のもたれし柳指れてあり
ひねもすの露尻に馴れ静せり
釣道具背負ひて浅瀬渡りけり
吉里 竜耳
緬爛の法衣の僧や甘茶寺

コロネドの迷ひ出り江の柳絮かな
朝顔に低き柱でありにけり
彌々に凋む朝顔や旭は彌々にさす
春愁の新妻夫を送り佇つ

海紅派 俳句

増本美篠

砂鹿吹きまくわれらの生活
山に草枯れて放牧の馬などゐる
われらの生活心にもなく月日の
和平の日祈るともなく薄さす陽の波
心もちほにかみ娘横向いて通る

アトベ築く人に柳絮の流れかな
アリゾナの磨きし珠や春灯
衣更へて聖堂の段よりけり
日永の児哀れや汝は無口僻
夜壁に穿つ風窓夏近し
小田 華泉

第五十二回

マンザナ川柳句會

五月二十二日
於廿九の十五

宿題 土 森田玉兎選

○天位 ヒルリスト 懸地丘上

結局は土に生き抜く日本人

評 在田同胞の至言 律の生活を
高調した力強い作品である

○地位 富田露光

親しんだ土へ最後の窓をあけ

評 思ひもよらぬ収容転住を
最近味うて来たくらしい経験の
一つで一語痛切に當時を回想さ
せられる

○人位 瀧田草露

土と汗まみれて仰ぐ明日の空

評 明日の空はけいて暗くはない、
希望にかやく太陽の夕映である
主眼の気魄が表現されてある

33

△五客 麓氏

土の味忘れて早い瓜の伸び
土團子家苞にする小さい客

△ 青雲

土の香が込み合って居る露天劇

△ 鳥城

柵外の土を踏みたい日が待たれ

△ 麓民

徒食にも飽きて戀しい土の味

秀逸 三木

もう一度土に還るに腕をなで

○ 三木

土いぢり妻も手傳ふ小半日

○ 巴水

生き甲斐を土に歸りてやと知り

○ ホストン 凡才

動乱を外に耕す幸に居る

○ 草露

土埃り龍巻くあたり野菜園

○ 狂月

経験は学説よりも土を知り

手織結みたよな編を土に見せ 狂月
 土に生き榮えし如州も過去の夢 塩山
 晚鐘に静かに祈る土の手で 扇城
 朝夕を親しむ土にある希望 鏡水
 春空に奉仕家揃ひ 鎌の音 王園
 また一つ土塚殖えて冷い風 溪山
 低飛行土を甜めてくやうに這ひ 虎山
 もう生へて来そう土面をじつと見る さゆり
 童心に返つて見たり 土遊び
 軸吟 選者
 土ばかり踏んでる出市草臥れる
 やつと根を下ろした土も冷た過ぎ

席題 〇撫でる 互選

天位 瀧川巴水
 行きづりにそつと可愛い顔まで
 地位 速水白舟
 撫で上げし櫛に 白髪が冥く見え
 人位 仁熊鳥城
 ゴールイン 愛馬の顔を撫でてやり
 人位 富田露光
 その過矢一度は撫で言ひきかせ
 人位 守儀林蔵
 初物の艶へ思はずなでて見る

宿題 〇忘れぬ 互選

天位 仁熊鳥城
 忘れよと思ふ心が 邪魔になり
 地位 富田虎山
 忘れては居らぬ 嬉しい友の文
 人位 新野順城
 忘れたい思ひ 日記にまた思ひ
 人位 山内狂月

買物へ指を括って妻は笑み
人位 ポストン 松谷緑泉
忘れられて砂漠に眠る無縁家

十客

旅先きの思出話 忘れ兼ぬ 一仙

○ 忘れてるやうな顔する 瞳のやりは 大海
ポストン

○ 移民地に 齢も忘れて 若く居る 玉園
ポストン

○ 挨拶へ思ひ出せない手を握り 如骨
ポストン

○ 一切を忘れて釣の幸に居る 凡才
ポストン

○ 思出は忘れな草の庭に咲き 青雲

○ 成り行きに任かせて趣味に日を忘れ 青雲
ポストン

○ 半世の苦勞忘れる娘の嫁ぐ夜 里江

○ 苦勞した母へ忘れぬペンをとり 幽香
ポストン

○ 歸めて居ても未練の夢を追ひ 草露

王八音頭 琴の音か

峯の嵐か 松風か

○ 嵯峨野の奥の 琴の音か 賤が家に
君を慕ふて 想夫憐 不登

○ ソンナ女が アツタナラ

○ 浮世道化し 武夫を

○ 松 夜更けて訪へど 問あけず
深草の野に 袖ぬらう

○ ソンナ女が アツタナラ

○ 弦月凄く カヨテ鳴く

○ 砂漠の森の 草の庵

○ 誠 都はなれて 遙かに行く
ソナナ女が アツタナラ



石の鑑賞の夕べを観る 加能子



石についての講演と鑑賞の夕べが文藝同人主催で開かれるといふ張紙がメスの掲示板の隅に目についた。かねて待望のこととして、其二三七日をまつたところか其日は生憎、こゝで初めての日本映画の撮影があるといふ事で或は変更をみるのではないかと思つたが、予定通り開かれた。却つて同好の少人数で、ゆつくりお話し聞かせて頂くと喜んで会場三二六のメスホールへ行く。定刻七時半といふてはホストンの夕陽はまだ高い。それなのにこれは又はや十数人、婦人も交つてゐられるので私も気強くなつて後についてはいらる。

講演者の中館トクタツ。説明者の飯田ロイヤ氏は蒐集の石を研究的に分類し食卓を縦にして、日英両語の解説附きで、すでに陳列して居られる。もう質問する人には親切に説明して居られる。其首鑑に近い石の全部がホストン入所以来僅々七八ヶ月間のこの附近の蒐集とまいて驚く。これ等の石の口で殊に私の目を奪つたものは

大きな美しい朱の塊、金剛石は次ぐ硬鉱スイコン（ニカノズ）、ルビー、トパス、金、銀、銅を含有する石、インディアン、モハベ族の石、戦場であるとか、磁石や燐石で作った石の、矢、などである、研がれて指輪にいわれてよいように光つて居る。オパールやアングナルド！には心を惹かれた、これを見せられは又石標しが増へるだろう。やがて秘蔵の石へり紙袋をさかたり、小箱を抱えたりして集る人が多く、百人近い人である。陳列を見て映画へ廻つた人は三十人位あったやうだ。

八時半からドクタ一の講演、山根さんの串刺しでは、氏は僅々四五
年勉強の日本語との謙遜であつたが、^の聴いて、實に立派なものであ
る。そして失礼ですが、あの著書に興味に激し、蘊藻の深いのに敬
服しないでは居られない、お話の中に星の事や河のことも面白い
と思つた。ドクターは實はホストンにまゐる迄は、父島の沙漠で厭
やな所とばかり思つたが、今はこんな楽しい面白い所はない。^{と思ふ}
と仰るが、私共はもつと大自然に刮目すべきだと思ふ。
尚きければドクターは此附近に二産して居る植物について、又地方の誌
實についても讀べて居られるそうであるが、機会があれば是非、同
はせて、いたいたいものと思ふ。講演の後、石の鑑定を預けて、一、一説明が
あり、珍石と折紙がついて得意の人もあつた。私の石をど知んどの石
といはれたのは情けない、でも捨てかねて其保持を歸へつた。
談笑のうちに打とけた趣味深い實際的の智識を得られた、近頃めづ
らしい楽しい夜であつた。
ゆまの魚もれし、眞砂選りあつめ、鑑賞の一夜は更けて静けし
(五月二十七日夜)

子別れやくさ

くすのせ

長松手めエは可愛いな
死んだお母アに似二つ
手めエか愛うてはらねエが
渡せの意地だ今更に
二足の草鞋は履かれねエ
これが婆で別れだぞ
今宵の鐘は散子達だ
ごんく鳴ったら泣き
ちゃんくばらく大泣き
悪代官や駄三びん
雁首取るか取らるるか
男一足鐵火張り
どうせ村には帰れねエ
夜更けて月の出る頃にや
長エ草鞋だ股旅だ
落ちつく先きは首の臺
出た日が命日歎けくまよ
邪怪り父ちやと恨むまよ



やくざの義理も我理のうち
槍は錆びてゐるが錆びぬ
腰の段平伊達やねエ
旗本くづれの此のやうな
あすお仕置になつたとて
なんの文句があるものか
鴉がかあゝ啼いたなら
お母の遺言思ひ出せ
ニボ美濃屋は上平だ
肥え櫓橋櫓や藝聖氣
やくざの餓えや食てれな
くれぐれも頼んだぞ
長公手めエも武士の義理
昨夜の注ぎな目か下る
昨夜の手銭と此の系図
踏み外すまよ人の道
まめで暮らせよ安樂に
それぢや長公徳や作らね



モハ遺物
原色茶褐と白

短歌

(年接順)

田中白水



モハ遺物

(多) 子

入所當時 二首

軒毎を火熱に泣く幼ふの聲胸を打つ夜半の寝やめに
日なるとて幼きふろのいたふに駆け行へ人々病院車来る

行と水に止まるも知らずコラドの河は流来は流るも知らん
我心大コラドの水に似て大きゆとりあひそかに感す

大天に帽もやぶらぎをきりて一息の黒さかやと
心より喜ぶ友の嫁と娘に今日の面われはれづれと見ゆ

贈られ還るに心付き忘れ居る吾のと戦思ふも

林 君 江

吾部屋の秀峰の美人畫朝夕に見つつ起居のかげやうる
 鈴虫ふ似たる聲する草むらにるば 休む畫のそよ 然
 うふだれ 花のほろれや夜の雨はいたも降りけむ軒端のばらに
 牛に喰はすも早と時きたる家にはのへは倒れ伏す夜來の雨に
 たほれ まる世常れちけり庭の荳蔻子入れちり得ずるも過ぎ
 夢 ころも倒れ まるに咲き出で 菊起 一つ枝たそやうる
 南風まふ吹きやまど雨に明け雨に暮れゆく如月たるまば
 子の望む意味線の字ほどき教へ居り雨にこぼれるつれづれの夜を
 けちらるる雨にしばしを見す過ぎ 藤の蕾のほろび初め
 うす紫とる所にほろびて軒の上藤あみ咲き出でんとし
 玉座にものづれる心地の縁に立ち花を眺めて有り たるゆら
 篝もえて賑ふ夜櫻のうつろいと 然思ひ出にけりよるもの花見そ
 ユタ州 トパス 井上 豊美
 夢に見 加州の山やわらひ 狩醒るそよ 林 夢思ひ出

山田きみ子

すこやかにほろこさるるや
患者みよの苦しめ堪えそむか
指のいき突きてすらなほ氣が
いさか風も通らぬ食堂の午
遊びてもあるびつとあか
（えんき）忘れぬ草様に
（おしき）鴛鴦の番はも
（おしき）片羽鳥胸にいた
（おしき）君がみうるれ

忘れぬ草

子の教ふ飛行機見んと眼に追へば
遠居る母をわれも戀ひつゝ
父の命日と今宵を吾子と香
父なき子に残して働けば
かすみの歎もなきが
試練心きほひてたえぬ人

夜風の外の面吹き過ぐる音ゆゑし心はち居ずききとおのつく
螢とぶと友の便りにアルカシーの夏の景色とあるやと思ふ

風 戸 登代子

軍用鳩来る

たゞ羽群むれをばふりて屋根の上に軍用鳩の首切りげ居る
軍用の鳩は馴れたりバラツのステップに居り去らんとせせず
美しくやさしい鳩の足に見るは S A 軍のちる——いかめし
カーキの服をまとへる兵士等迷子の鳩をたづねとりける
軍用の鳩をいだける兵士つはものをめぐりあつするおやきまぐれ群

日本語圖書室にて

ほうから

日本語の書にうゑたる同胞よまぐれき圖書の残り少ない
古本のちわをのびつつ思ふおわがはらわりの慰まふこと
寄せられ古本くりとふと見出し若かりし日の愛誦の詩よ

ポストンの風の日

風強し砂やうくと地を這一ばや波寄する海の邊に似て
吹きまゐる風に乗りつゝ走り見て興^{きよう}ずるまに此所に慣^なれ
たり

西 真砂

あはむ目のつと知らえを捕はれ人ば往きけり吾れ來ぬこに
初夏の光みあまふ國を立ちて行とわの若人は
これの世を生きぬややは同胞の老若男女續きて立つるこ

大 吉 郎

送行偈を讀みて

往く人も見送る人も同胞の思は同じみ國ふひ

現境過

月光^{めいげつ}のいたるぬ里はなけれどもとや折り曇るとはそれの身は

里 飼

池の端に朝夕立ちて餌食やる子供がたまたまに見ゆ

鈴り 愛する

舟に出で 吾子と逢ふべきすがあふはや二たせす夏は来
 虫の音に涼む樂 け夜のほろろ 灼熱のひるを忘る如き
 われ人もうるは心保たま ぬや少漠に佇みそ有りやと
 神のみ業の奇き導き 繪にも見えぬ夕映え雲に彩る山は
 朝夕を眼に親しめる岩山も砂風吹く日はさうふひにならん

楠瀬 正美

村田聖明君ハート大亭にて研李のためポストンに出發の前日來訪

ケブリツダに明日立つ友の訪ね来て言葉少なにならば 語らふ

彼岸會に線香を折りて供養 一つづゝに思ふ故里の墓

初戀の人は不遇をたより來ぬ文を書かむの涼 木陰に
 夜もすがら愛しさ人の肩揉みつつ 慥みは問はず 語らぬ
 茶椀酒燗る吾どもありあけと 斯める 歎きを人は知らずも
 飲み飲めど 酔へぬ 狂へぬ 吾淋 悲戀の 終に癒ゆる日なきか

トマス 井上 豊美

ユタの原春は來ぬ水ど花咲か 朧月之夜を獨りながめ

石拾ひ

良

知

流れき幾年月も草枕なつともなす石れどぞみ
阿れよ—おれよ—とすそる石の風情にまじりし

五云

しき泥の雪を破りて昂るる大日輪の姿雄々—と

配所に迎へたる母の日

七き母も世にある母も今宵いふことに配所の母に惚げん

市俄古に行く友を送る

送る人送る人も土煙りあがつゝ交を別離のことば
土煙り立ち籠む中にいづれ友の旅立ちづる見えやなりや

石拾ひ

よき子

アリゾナの山に石を拾ひて石のいふをきくと思ふ
その石の石に個性ありけりまじりと見る自然のた

五云

忘れられしアリゾナの朝を夕をふれし五彩れをみる石を

わだつみ北空に波も 何れもくくに雲帆停帆ある雲霞

轉佳所にもりアルデーを迎えて人なき加洲の墓地を思ふ

七き人も淋 子と思ふ

子と思ふ

外つ國に生れ 子等折にふれ 故郷の夢もけふも 子と思ふ心の 闇を雲深き山路越たさるこゝ地こそすれ

初夏

軒並に植え 五木のすりと のびゆくかげ越なる可のみ見る

其菊池牧師の送別会の為には岩間老人がけふ山より
アイオニリーの花をとりて送る水しを見て詠める

竹馬 子

すいすい水と ころころ心には 山は ころころ花をとりて

初夏

植えくま柳ふらけ 若葉の風微かなの 窓口にけふの初夏

窓にころる 青き若葉の影ゆれ 初夏の夕ぐれ

送別会の席にて

其菊池牧師

桐はれの身にて 花ととも 水ととも 流るる 止むを得ず

澳村曉平九百十年勅題(昔の根)

太平洋印度の灘にあみたまわし今朝澳は^{ザイ}大魁の奥

述懐

今波を渡せば多うひれきたたふ昨日けつのが
よき人れうけこそわれもあけれ^{サキ}在舟のあす

インターンせられ^イまの^イまの^イ徳阪操

東の國のわかれを思ひ^イびが^イあが^イる^イか^イと^イあ^イは^イる^イを
やも願ふとけいも思ひ胸に秘め^イす^イひ^イ巾^イの^イん^イせ^イの^イ衆^イ彼^イに
お^イを^イた^イは^イる^イ郷^イつ^イと^イも^イむ^イあ^イあ^イる^イか^イす^イれ^イう^イに^イは^イる^イ身^イは^イん
涙^イも^イあ^イる^イ月^イの^イお^イん^イら^イわ^イし^イり^イ天^イに^イ舞^イふ^イ地^イを^イ寂^イと^イし^イ
君^イけ^イ何^イと^イや^イわ^イび^イて^イ春^イう^イせ^イば^イ吹^イく^イ風^イも^イあ^イら^イう^イな^イす^イい^イと^イ思^イひ^イだ^イ
^イう^イあ^イを

デザートデージー

砂原に何は水深くも咲けるうふたれうは^イね^イらん^イ花^イす^イあ^イら^イ成

砂原にぬぐる人ちとみぢれ咲くデージーの花やこゝろけらるる

雲

大空にけしきもわたる横雲のうすれあみにくるゝ暮
山や空空や山とも見えぬわがすおもひはてなき雲のゆきめひ
あやふきあぢい水でていつかあやすすりひゆくか風のまに
たもぐれの空れむと雲も音もたうと湧きあふと見えれば
湧きあふと

風

夏の朝そよ吹く風の音もたうとわがすにゆるぐ庭の朝顔
日盛りの土々焼くると真昼時窓に待たるゝ風の音づれ
風吹くば海原遠きゝつとそよとろかりのあやとづれきかま
はしけれ

柴田 勇

初夏あれど寝られぬ暑さに思ふふと七八月を如何に過ぐすと
来るゝ初夏哉軒端に傳ふ朝顔は生命長かれ涼きもの哉

朝ぼろけ眼やあそふ窓の外見れば氣はすかゞ
姿見ぬ歌よを人を懐く見ゆすけり
夕ぐれば西風強し砂を吹く其居ある夜に
あづかり夜に満ちし思ひに堪えぬ
夕暮水のせいの涼みも
あつちるよ思はぬ人に訪ねる水喜にも
あつちるものも
あつちるものも

抑留所の夫の返歌

小林千代女

名や世 茅柳のぶく浅縁
おとし風に吹く水素るる
散水散るおとし街の茅柳より影面白く
屋根よりるる毛むより尚ほ仲むたれ
柳を散水するも
やとちば 柳の元に仲むたれ思ふ多きこと
数りや
百五度の暑き湯わけを追ひあづき
千鶴を預けし今日も
可憐い齒足も
千鶴は春今日この歌は
み初めける
足どもまだあづき
人形を抱いて遊ぶと
千鶴は

啼々として土にぞろろの声をやめてばよ祖母を呼ぶ聲いふを

夏の心

はつ夏の陽ざしをゆれ水浸み水泳浴する子は樂しき
動あふると真白き雪をわけ出で野面映照るを初夏の月
杉むらあふ年のうさふさに集あふるを見えつる月するはうづかふ

志願兵士を送る

兵役法改むなりて第一に召され出でたる志願兵の
やうなると縁り返つて元氣よく志願兵士を見れば泣くぬ
志願兵召し出されそのあとを父母の思ひぬ何ばかりある
者しといひればさうあり戦の場には銃とる兵士思へど

自命の境遇

山北凉水

日は週に週は月にと流れやを夏の中へ一年も過ぐ
捕はれに儘にたれぬは生流す平ら言へぬ池の鯉を
父母は老いふ供は出征し其母の身を尋る妻こそ不憐れ思ふ

廿日 明け暮れを無為に暮らして繁忙に働けむ祖國のはうが
木曜 奈何にして日を有意義に暮らさんと想ひ悩みつる日を暮

廿六日 朝夕の涼しき風は讀み書きの心を、水とあり、奈何せん

廿九日 今頃の夜の涼しき秋なれば虫ありと鳴けり、聲あげ々
土曜 鳴く虫はむし、居るぬ、ポストンのキャンプの外は風の音のみ

三十日 水び住ひ感傷をとり、枯木の如き我れを感じずる
日曜 帰るべき時、識らず行末は一切無明、月も曇り

廿一日 明日は明日、今日は今日とて暮らす、奈何に無味なる秋は来れども
月曜 悲觀せむ從容として時を待つ、はる、れ身の健かたれよ

九月一日 紅葉示す、秋も涼し、風は吹き、國を想は、意気な、高き
火曜 暦月はまた改まる、九月とは菊の花咲く、我れ戀ひ、き

今日こそは九月の始め、沙漠にもやめて、明月待つを、樂み

二日 水曜 颯爽と風にひらめく聯隊旗想はぐるまあり日出見るたび

今の代に朝日の御旗傾けし 闇の吾界を照らす象徴

三日 木曜 在米の同胞の末思ひ出で泣くに泣かれを秋は更けゆく

朝毎に目醒むれば先づはらかられ示や如何にと思ひ慍み

四日 金曜 悠々と動く無心の雲戀ひし 狭き地上に我はいけにえ

山上に仰ぎ寝て見る天空はかゝも深きにあり人の世は

五日 土曜 むらりと地平線上山をふくみ沙漠の雲に朝日輝く

日米の雌雄を決するソロソンの澄みたる秋に月はやえふん

六日 日曜 日曜日寸にも足らぬ奥釣りて歡ぶ心無邪氣ありける

朝またき煙霧たちびく山々に秋は閑けゆき峰は鋭と云

七日 月曜 全世界戦のニュース競ひ聴く時も吾等たざる術あり

と真夜中に起き出て見れば数千人や齊しく眠る静けさ

八日 火曜 魏峨として聳ゆる巖山秋風に吹かれて清く山肌の見ゆ

けらからけ霜に驕れる菊の花虚げりて意氣衰へや

水曜

我心まだ老ひやうか日本着の少女の舞の姿をうづ

尺の合奏聴いて月なきを悲しむ心変らざりけり

木曜

キャンブでも住めば其間是我あり造作急ぐ此所に彼處に

金曜

一の谷平家の管絃偲ぶかふ秋のボストン歌舞に夜は更け

砂山に登りて見れば湖を朝の縁乃霜に眠りて

土曜

足びきれ山北端近き二日月絲より細く日影より淡し

名月の月の初めの二日月大満月の偉容ほの見える

日曜

三日月は静かに木林を照らしはるる帰ぬ人を探し得ぬ夜

川か木林その他いづこに秘密ある撥け諸人努み勵みて

月曜

数百の男女叢林探せども何所潜める跡方もあらず

人力を盡し探せん諸共に人の命の奈何に尊き

火曜

歸り來ぬ父を尋ぬる妻や子の次女に泣きぬれ幾度か

夜となく晝は素より公共に盡す青年姿颯爽

水曜

仲秋に大氣も晴れて我心輕かるべきにや斯く重き

紙の花白き十字に飾りたてみたよ吊ふ婦女の艶し

十七日 木曜 オストンに花うき花けしめその隣りに咲きし朝顔の花

朝顔は赤き心の花開き主の丹精先づ報いけり

十八日 金曜 朝顔は幾つ咲きしと未明より隣の垣根覗く樂しき

朝咲いて晝に萎れる朝顔の暑さに慍むはくちんに似て

十九日 土曜 冷涼あまり激しきためなるか外人ふく淋しき夕べ

見渡せば煙霧こもりて灯は眠り遠き連山夢より淡々

二十日 日曜 日曜日又來れども何所にか紅葉を探り秋を賞せん

察するに葡萄に桃は紅葉し中加の秋を既に飾らん

廿一日 月曜 病める者老ひに人と不帰此旅浮世の秋は斯くて更け逝く

黒雲は雨を呼ばんと擴がれば四圍の連客黒繪の如し

廿二日 火曜 おどろく黄葉ありき色ありき重なる峰の鮮うに見ゆ

廿三日 水曜 秋あるが煙れる山のみありきも晝の暑きは尚ほ堪え難き

南州の大島棲居偲ぶありき明け暮れる鬼角淋しき

木曜

朱をとき大盤のご名月は山の端出て人驚かす

名月は何處も同じ沙漠地に歴史を偲び人を泣かす

金曜

日は昇り残月未だ尚ほ高し故郷遠か遠征のつらさに

西は煙東は靄か今頃の朝の山々繪より美と云

ミネドカ

北村源正

ベスボール 陽焼けの顔にある氣焔

大陸の暑さを遊ぶ兒は達者

大 吉 郎

同胞は光る平和に希望もち

創作

見合

らすのせ



インディアン美術

Aさんは姉が弟を愛するやうな優しい目で追ひ廻るやうに彼を見詰めて
長く溜息した。そして又沈々話を續けた。彼も親しみの耳を傾けた。

貴方、ほんとに二葉亭四迷の、其面目影そっくりよ。あんな帝大出の秀才が世渡りか下牛でルンペンに落ちがれて外國で孤獨で死んで仕舞ふでしよう。妾、貴方を見ると、つりや情なくなるわ、何でも出来るし、人倍

親切な氣立てだから人に好かれる素質だつた國へも歸らず、結婚せせう
友達や先輩に惜しまれながらだん／＼年とつて行くのを妾傍で觀てゐ
るのが立／＼堪らないの、舞臺でゐる人達は何だ彼だとデマを放送する
でねえ、舞臺の上で親不孝な大根役者したりして羞しくもないの、之が妾
婆なら馬の脚でも情女が出来るか知れないかねえ、お酒や女の有る世界な
ら獨りで飛び廻るよりは、そりやあ面白いでしょうが此所ではどうかと思ふね
ねえ、單身生活を清算なさいな、妾、いゝ女を見付けて上げよう、どん
な形かお好きなの。あやのり市注文が多いと一生結婚出来ませんよ。
△低能かいのです、ぽかんとしたのが、
。あハッ 本當の？、ちがいですの、

△賢い女は私を相手にしませんが、金無しの老書生ですからねえ、
。おや、馬鹿には謙遜ね、だってあんまり振けたのもいけないわよ、今
恰度いゝ方があるのよ、後あさんよ、一度會つてみたらどう？、
△見合ひですか、差／＼いゝなあ、

。あれだ、其初めなのが貴方の財産よ、今日妾のメスへ侍／＼入らうしやい、そ
してよく見たら、いゝわ、貴方が好むに／＼なるから、

△可厭だなあ、僕の所へ押／＼張つてゐて、いゝ人だが、あ、
チーフのＢ＼＼が特別に走して下さった、いゝ奥さんは女僕やうに朗かにサ
ビスして下さった、肝心の後補者は向ふ端で働いてゐた、いゝ體格だった。
(終)

千賀 朱をとり大盤のご多月山は山の端出て人驚かす
 名月は何處も同く沙漠地に歴史を偲ぶ人を泣かす
 千賀 日は昇り残月未だ尚ほ高し故郷遠か遠征のつら
 西は煙東は霞か今頃の朝の山々繪より美と云

ミネドカ 北村源正

ベスボール 陽焼けの顔にある氣焔
 大陸の暑さを遊ぶ兒は達者

大吉郎

同胞は光る平和に希望しち

創作 見合

るすのせ

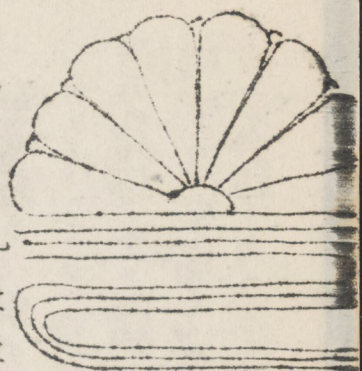


インデアン美術

Aさんは姉が弟を愛するやうな優しい目で追ひ継ぎやうに彼を見詰めて
 長し／＼溜息した。そして又沈々話を續けた。彼も親しみの耳を傾けた。
 貴方、ほんとに三葉亭四迷の、其面目影そっくりよ。あんな帝大出の秀才が世渡りか下牛でルンペンに落ちがれて外國で孤獨で死んで仕舞ふでしよう。妾、貴方を見ると、つり／＼情なくなるわ。何でも出来るし、人倍

追加 57

親切な氣立てだから人に好かれる素質だ。た國へも帰らず、結婚もせず、
 友達や先輩に惜しめられだん／＼年とって行くのを、妾、傍で觀てゐるのが辛くて堪らない。戀で困る人達は何だ彼だとデマを放送するでねえ、舞台の上で親不孝な大根役者したりして羞しくもないの。之が妾、妾なら馬の脚でも情女が出来るか知れないかねえ、お酒や女の有る世界なら裸で飛び廻るゝは、そりやあ面白いでしょうが此所ではどうかと思ふわねえ、裸身生活を清算なさいな。妾、いのを見付け上げよう。どんな型かお好きなの。あ、有り、市注文が多いと一生結婚出来ませんよ。
 △低能かいこです。ぽかんとしたのが、
 △あ、本當の、ちがいですの。
 △賢い女は私を相手にしませんよ。金無しの老書生ですからねえ、
 △おや、馬鹿にも謙遜ね。だってあんまり振けたものいけないわよ。今、
 △見合ひですか、妾、いいなあ。
 △あれだ、其初心のものが貴方の財産よ。今日妾のメス（ごまん）一掃に入らうしやい、そしてよく見たら、これ、貴方が好む好むになるから、
 △可厭だなあ、僕の所へ一掃張つて来て一掃するといふんだがなあ、
 ナーフのBさんが特別に馳走して下さった。此奥の人は女僕やうに朗かにサーブスして下さった。肝心の後補者は向ふ端で働いてるだ、い、體格だった。（終）



脚本

序文

(前号の續き)

久すのせ

正秀は形勢益々非な時代に最も活躍したか酬ひられなかつた、其妻は南
より廣く知られざる書をば一冊の哀詩が出来る、吉野記や十津川譜によ
ると妻正子は古今の烈婦である、其腕力と膽力巴御前に勝る、人に健うそ
前線に働こうとしたが、女を戦場に出さぬが楠木の家憲だにと、あからん
せられむなしく皇后を奉じて落ち行く時経溪に入つて盡き、咄嗟に
傍の樹を引倒して橋とし先づ皇后を奉護し、次に上臈を三人、二人を鼻
ひ二人を両腕に抱えて渡り、橋を押し流した、追突窮して来た敵兵も
感歎して只一筋の遠矢を放たず茫然見送った。

正平や朝成(幼名淨水)の妻の事蹟も是非調べねばならぬ、
女はつにもまだローマンスの女性が多からう、自分は殘餘の半生を南朝女
性研究に費したと思ふ。

楠木久子は正成の室、建武三年又は四十三で果てた、時に久子は三十三、
二人共厄年であつた、只一人の兄南江備前守正忠も、義兄正成と並んで割腹
した、生れてすぐ母は産褥熱で逝き、五才の時父にも別れた、兄二人、妹二人
であつた彼女は念々身よりの無い寡婦となつたが幸子室には恵まれた、
正成は出で、は將、入つては相の大聖であり、一夫一妻主義で品行方正、家庭で

は良き父であつた。二人の間には男兒ばかり六人、有つた。十二才の正行を頭に、正時、正儀、正秀、正平、朝成がそれである。夫死して後は子供の教養に精根を打ち込んだ。母の丹精は面びられた。孰れもあらぬ驕驕兒ばかりで、父の後継者として申分無かつた。斯くの如くにして育て上げた子も孫も長ずるに及んで、慥に犠牲に捧げ盡した。家の子郎党には禮を教へた。人皆其德に心服して、足利の誘惑に走らなかつた。然し、天あるか命あるか、さしに堅固であつた。統後の護りも、長期戦に多くの人材を失ひ、忠臣の補充意の如くならず、財政逼迫し、刀折れ矢盡きて凋落した。不遇の大忠臣に配するに絶大の賢夫人であつた。母性愛の権化であり、統後女性の龜鑑である。南朝約六十年、傾く宮居を支えた此隠れた人柱はもつと、崇められねばならぬ。

私は最初の試みとして、辨内侍を書いたが、参考書の手に入らなかつた。閉口した。之は調査不充分であるから、史劇でない、未完の藝術品である。只管先輩諸賢の御叱正を仰いで改作したいと思ふ。私の方しい讀書から歸納し得た臆気の結論を申せば、

如意輪寺に辨内侍が居なかつたならば、正行は或は立寄らなかつたので、はあ、あ、の、只、頭髮を納め、辞世の歌を遺すだけなら、菩提寺である。河内の觀心寺を選ばずであらう。其所には母君も居られる。父子二代の恩師、臘ろう覚かく房ぼう聖や瑜ゆも健在である。父の首塚も在るではないか。どの書物にも正行は病弱であつたと書かれてある。心臓か肺病か、鬼に角く蒲柳の質で

眉目秀麗多感の詩人で外柔内剛の青年武將であつたと察せられる。
敬虔な佛教徒であつたという悟は有つた筈、不自然に生の執着は持合せな
かつたと觀られる。辨内侍を失戀させて尼にまでさせた可^いとも世に長らう
ぐもあらぬ身の假のちがりを如何で結ばむ止の歌には明日の戦死が
約束せられてゐるといふ意味以外に病死を豫感したものと多分に含
まれてゐると思ふ、可^い還らざるとかゝつて思ふは梓弓亡き教に入らるゑと
そとどむる止の辞世は辨内侍への説明ではあるやういか、最初の歌だけ
では意志が通じなかつたので一處説明の必要に迫られてゐたと思ふ、で
結局此二つの歌は一つと見る可^いと思ふ、彼の戀愛觀、責任觀念、人生觀
等よく透み出てゐる。

正平四年十二月二十七日正行が最後の市廛乞ひに参内した時、畏くも、主上
には赤涙ながらに優渥な勅語を賜はつた、南朝の柱石だぞ、号れくも
死ぬなと教を下されたが、正行は遂に還つて来なかつた、其日から十日、即ち
西平五年一月六日、飯盛山下四條畷で果てた、時に二十五才。

小楠公は二度、天皇様の御時侍を裏切り奉つた、折南く、お思召しに叛いて
辨内侍を拜辞した、股肱の望みを懸けて侍り給ふ主上を侍る後膳させた。
之には昔から是非の論はあるが、孰れも至誠から出た行為で咎むべき助
合のものでない、痴身であつた、勝算無く戦争は近づいた、一妻一妾主義、我は
父祖の遺訓である、優生学的見地からも辨内侍と結婚すべきでない。
おせ生還しなかつたが、それは重傷を負つたからで、武士として死所を得

幸福感に浸つて從容腹を切つたのである。

高師直兄弟は長驅して一蹶に吾野を陥入れた。其後五儀等の弟も逆流に掉して慘勝悲壯天運の挽回に勉めたが時である。時の力はどうにもならなかつた。労多くして効少く、戦ふ毎に味方は遞減し大楠木の家台骨は倒れた。楠木の没落は南北合體となつて幕を閉じた。正成死して五、百三十三年後皇政復古して明治元年とあつた。

史よ人として小楠公を最も敬愛する。支那の教義は孝に偏して懺らなしい。小楠公は忠孝一致の範を示した。私の拙筆到底公の眞面目を写せないので、皆様の指教を願つて二層の感激をもつて稿を改めます。

十九百四十三年五月

在オーストリア收容所



消息

◎村田聖明君（留学生）ハバート入李希望でボストン、ケンブリッヂに行かれた。

◎和氣寛君（和氣湖月氏令息子）百瀬メリー嬢と結婚

◎山根幸子（オクラランド山根貞藏氏令嬢）松井三郎君と結婚

◎西村閑太史（義雄君）大学講師に就職 *Yaman College, Chesham, Ohio.*

◎古賀仁人君 市俄古太李入李の爲め出發

◎左の諸氏より機關誌を贈らる、

若人（比良男女青年会丸山郁雄氏）

文藝云（オーストリア第一館府大杉溪山氏）

編輯室便り

- 編輯の都合上御手稿の全部及び一部を次号に廻しました。
- から此奥御了解を願ひます。
- 御原稿には住所を認めてください宛名が知れぬので御返しするのに困ります。但し俳句と川柳だけは和氣氏が御預りして置きたことの事です。
- 本月からは新印刷機が使用出来ると樂んで居ました。但し逐々間に合ひませんので鮮明を缺く字句があるかも知れませんが悪御了解ください。
- 表紙は鶴岡画伯にお願ひしてホストンの岩山を描寫してもらつた景色であります。

客員

- | | |
|------|-----|
| 第一館府 | 正木氏 |
| 第二館府 | 田住氏 |
| 第三館府 | 中島氏 |
| | 西氏 |
| | 和氣氏 |

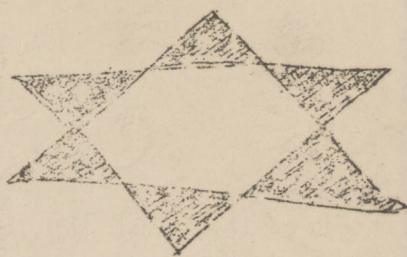
編輯部

- | | |
|------|------|
| 山根貞蔵 | 野田とく |
| 和氣田平 | 梅瀬正美 |

取次所

- | | | |
|------|-------|----------------------|
| 第一館府 | 正木氏 | 矢形氏 |
| 第二館府 | 長谷川氏 | 田住氏 |
| 第三館府 | 文藝同人社 | 310-11 Post N. Ariz. |

お詫び
材料運着のため發行遅延し誠に氣の毒様でした。



インデワ
遠星
タタ子